

の用途が形骸化したものが現れているという可能性を指摘した。ただし、これらはあくまでも一つの可能性を述べたにすぎない。「円形状石組」の認識と評価に対しては、今後の発掘調査による類例の増加に委ねると共に、その認識に対する客観性を高めるためにも、関係諸氏の批判と議論が必要とされる。また、冒頭にも述べたように、四隅突出型墳丘墓の周辺に営まれた様々な石を使用した施設との区別に関する諸問題も残っている。これは何故「円形」という形が現れるのかという問題にもつながる。これらの検討も視野に入れない限り、円形状石組の系譜、そして四隅突出型墳丘墓との関係を論ずることは出来ない。

小稿では特定の土器出土状況に対して検討を加えたが、今後は弥生時代前期以来の墓や墳墓全般における土器の出土状況に対しても検討を行う必要がある。特に、山陰地方と同じく日本海という共通の空間を有した地域に対する検討、すなわち北陸地方の四隅突出型墳丘墓や両丹地方の方形台状墓等の土器出土状況を含めた墳丘墓に現れる諸現象との比較検討は、各地の政治的領域や交流の解明に貢献できる可能性を孕んでいる。今少しの再整理を行い、改めて論ずることを期したい。

第2節 日本海沿岸部における方形貼石墓について — 中野美保2号墓の事例から —

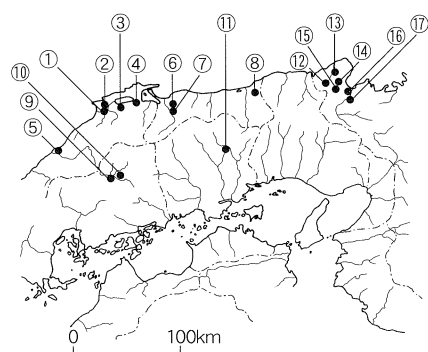
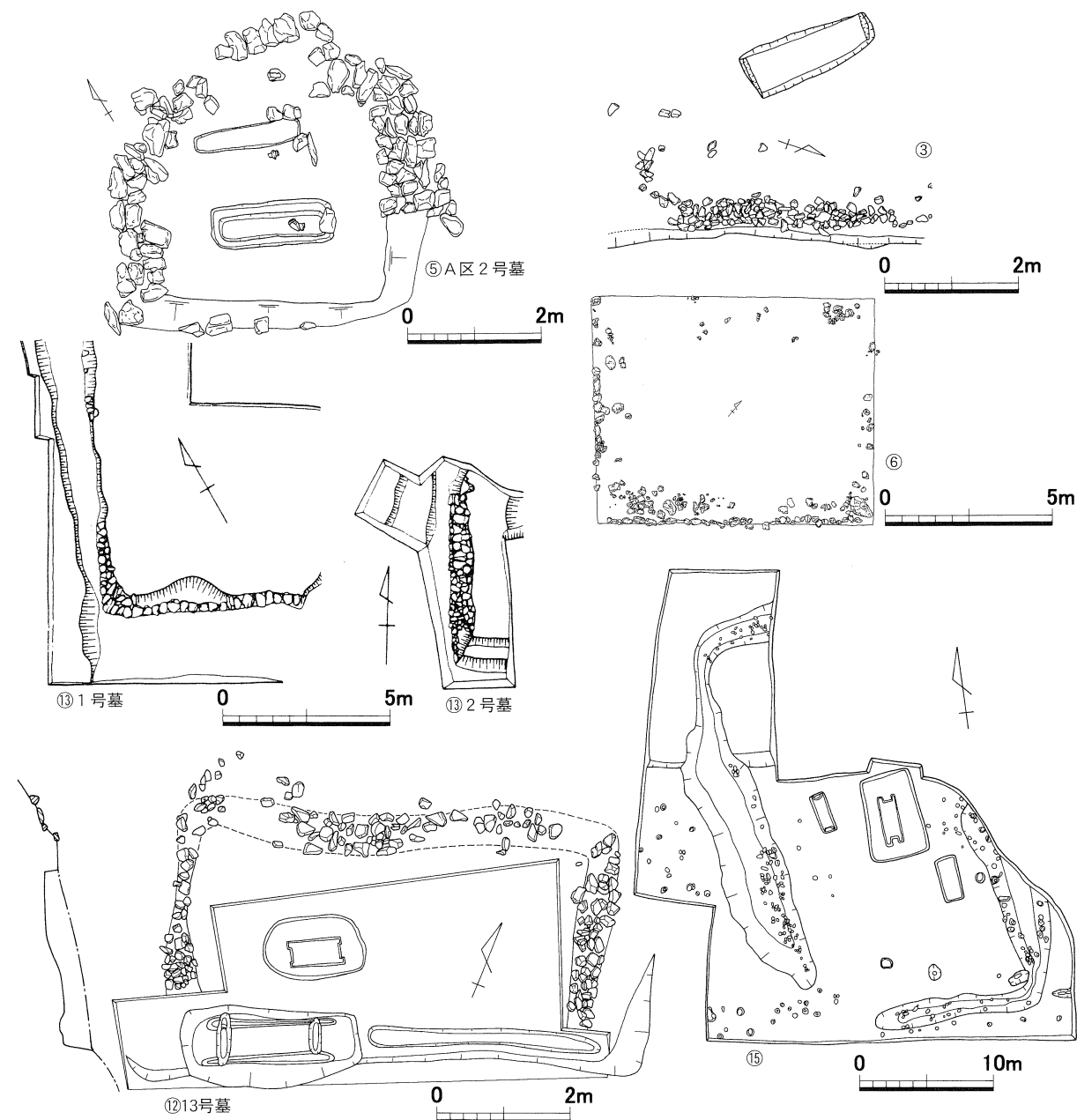
中野美保2号墓は、弥生時代中期中葉～後期前葉を中心に中国地方山間部から丹後地方以西の本州日本海沿岸で確認されている「方形貼（り）石墓」、「貼（り）石方形墳丘墓」、「方形貼石台状墓」、「方形貼石周溝墓」、「方形貼石区画墓」等の名称が与えられている墓制に属する（第129図）。ここでは、その総称として「方形貼石墓」の用語を採る。^{註9)}

この墓制の大半は弥生時代後期後半以降は減少する傾向にあり、丹後地方周辺を除く日本海沿岸部では四隅突出型墳丘墓という墓制が盛行する。現在まで議論されているのは、この墓制が四隅突出型墳丘墓という墓制の直接的な系譜に上るか否かというものであり、換言すれば四隅突出型墳丘墓の起源論に遡及される。

四隅突出型墳丘墓の起源論は、その「発生地」と「突出部の起源」という2つの問題に大別される。もちろん、両者は不可分の関係にあるのだが、前者の「発生地」については研究史上、一元的な起源とする見解と多元論的な見解との二者に大別することが出来る。前者を代表するものには、朝鮮半島起源説^{註10)}、中国地方山間部での成立とその一元的波及を説く見解^{註11)}、「ステッピングストーン（踏石状石列）」を四隅突出型墳丘墓の基本要素とし、その初現を中国山間部に求めた上で、「中国山間部型」と「山陰（伯耆・出雲）型」の展開を説く見解^{註12)}がある。後者では、弥生時代中期中葉～中期後葉の貼石の区画を持つ墳丘墓の「通路表現」に四隅突出型墳丘墓の「突出部」の根元を求めつつ、三次盆地（中国地方山間部）と日本海沿岸部で、系統の異なる四隅突出型墳丘墓の成立を説く見解^{註13)}がある。

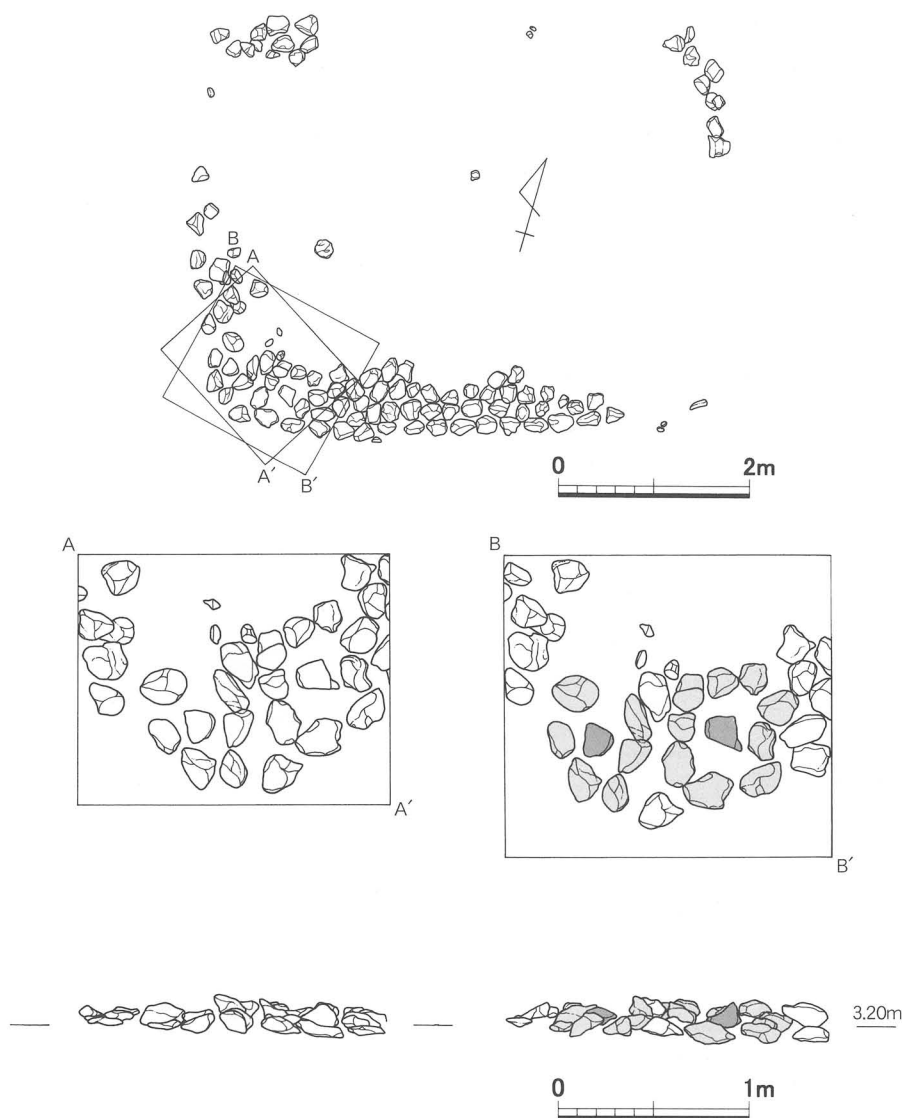
ここでは、先ず方形貼石墓の「隅部の形態」の分析を出発点として、上述の「起源論」について考えてみたい。そこで、中野美保2号墓のそれを検討する。中野美保2号墓の隅部が良好に残る箇所は、南西隅のみである。ここを詳細に観察すると、2つの所見が得られる。

1つは、貼石が墳丘コーナーに対して対角線上に2列並んでいるようにも見える（第130図のA－A'）。今1つは、2個の貼石を挟んで2つの円形状に並んだ石組（その中心には1個の石がある）が並んでいるようにも見える（第130図B－B'）。



- | | |
|-----------|-----------|
| ①中野美保2号墓 | ⑩四捨貫小原墳丘墓 |
| ②青木遺跡墳墓群 | ⑪門の山第1号墓 |
| ③三成1号墓 | ⑫小池墳墓群 |
| ④友田B区1号墓 | ⑬奈具岡墳墓群 |
| ⑤波来浜墳墓群 | ⑭千原墳丘墓 |
| ⑥洞ノ原2号墓 | ⑮寺岡墳丘墓 |
| ⑦仙谷3号墓 | ⑯日吉ヶ丘墳丘墓 |
| ⑧新井三嶋谷墳丘墓 | ⑰志高墳墓群 |
| ⑨花園墳墓群 | |

第129図 日本海沿岸部における方形貼石墓の諸例（中期中葉～後期前葉を中心に）



第130図 中野美保2号墓南西隅部の配石構造（上は $S = 1/80$ 、下は $S = 1/40$ ）

この南西隅部の形態をどのように理解するかによって、その評価は異なる。ここでは隅部の形態のあり方に2つの見解を提示しているが、第120図で示したスクリーントーンの石は墳丘隅部を意識したものと考えられる。第130図のA-A'は、2条の「踏石状石列」に見え、同図B-B'は隅部を2つの軸石から左右対称に、その中心に1個の石がある円形状の石組がこれを挟むような形で表飾するように見える。

前者の貼石のあり方を「踏石状石列」と理解すれば、2条の「踏石状石列」が並ぶ方形貼石墓と評価できる。また、2条の石列は墳丘隅部に対してほぼ45度の対角線上に並んでいることから、隅部の石のあり方を「踏石状石列」と認識することに妥当性が与えられる。ただし、この石列が実際の通路として、その機能に耐え得る構造のものであったかは、石の大きさやその間隔からは懷疑的にならざるを得ない。2条の石列を有する方形貼石墓の類例は、志高1号墓南東隅にその可能性がある。一方、四隅突出型墳丘墓では、後期前葉の尾高浅山1号墓の東側突出部に2条に並ぶ置き石存在の可能性が指摘されている^{註14)}。

後者の貼石のあり方は、貼石の遺存が比較的良好な南斜面のそれと比べて、隅部の貼石が減少し

て疎密の差が生じている結果、中心に1個の石がある円形状の石組という印象を得たと言える。

一方、2号墓の貼石の施工には一定の規則性が見られる。それは最も外側の貼石列（①とする）を規準とした場合、次に来る貼石列（②とする）は①の石と石のほぼ中間に石を貼り付け、さらに次に来る貼石列（③とする）は②の石と石のほぼ中間に石を貼り付けるという、「組み違い」を行っている。この規則性は厳密なものではないが、これによって結果的に円形状の石組に見える箇所が生じている可能性も十分にある。例えば、北西隅の貼石が挙げられる（図版26上）。

このような「組み違い」の緩やかな規則性が南西隅部で崩れ、石の疎密が生じている結果、先に記した後者の見方につながったものと考えられるのである。

いずれにせよ墳丘のコーナーには、他の斜面と異なった意識で貼石が施されているものと考えられる。

さらに中野美保2号墓の石の使われ方をもう少し大きく見てみると、四隅突出型墳丘墓のある要素と非常に類似する点が挙げられる。それは、中野美保2号墓の墳丘の最も外側の貼石列である。

先にも述べたが、この貼石列は墳丘に貼り付けられているのではなく、墳丘斜面を縁取るように並べられており、石自体も寝かされていると言うより、立てるように置かれている。これは、四隅突出型墳丘墓に見られる「立石」または「縁石」と同様のあり方を示している。

四隅突出型墳丘墓の貼石・列石を類型化し、その時間的変遷を分析した松本岩雄氏の分類に従えば、中野美保2号墓のそれはⅡA類に属する^{註15)}。

ここでⅠ類とⅡA類に属する四隅突出型墳丘墓の出現を検討するのに参考となるのが、鳥取県淀江町所在の洞ノ原墳墓群である。

すなわち、中期末～後期初頭に比定される洞ノ原2号墓（方形貼石墓）には列石が確認されている。洞ノ原2号墓と同時期には日本海沿岸部において最古の四隅突出型墳丘墓（洞ノ原1号墓）が出現している。このことから、日本海沿岸部においてはⅡA類（中野美保2号墓と同じ構造）が四隅突出型墳丘墓が出現する段階まで継続している。ただし、洞ノ原1号墓の貼石・列石構造はⅠ類に属しており、洞ノ原墳墓群内も含めた日本海沿岸部の後期前葉に遡る四隅突出型墳丘墓に、中野美保2号墓や洞ノ原2号墓のような構造のⅡA類が採用されている例は、鳥取県米子市所在の尾高浅山1号墓（後期前葉）の南東斜面で部分的に見られる可能性がある程度である^{註16)}。また、鳥根県八束郡宍道町所在の方形貼石墓、三成1号墓（中期後葉）の貼石もⅠ類に分類される。

一方、洞ノ原2号墓は同墳墓群中における最古と目される墳墓で、備後山間部の土器が検出されている。また、洞ノ原1号墓の突出部では「踏石状石列」が見られ、洞ノ原墳墓群の成立と日本海沿岸部の四隅突出型墳丘墓には、備後山間部との交錯した影響を多分に受けている旨が指摘されている^{註17)}。

最後に中野美保2号墓に関して言えば、①墳丘隅部を意識した2条の「踏石状石列」、②墳丘裾の「立石（縁石）」という現象が認められる。①は四隅突出型墳丘墓の系譜に上る資料として、同じく日本海沿岸部における多元的な起源論を検討して行く上で、重要な資料になるものとして評価できる。一方、②は四隅突出型墳丘墓の「貼石」と「立石」の系譜に上る可能性と、その系譜には上らない一線を画す可能性の2通りの解釈も考えられる。洞ノ原2号墓のあり方も踏まえて、日本海沿岸地域における方形貼石墓と中期後葉～後期前葉の四隅突出型墳丘墓の類例増加が待たれる。

脱稿後、出雲市北東部の扇状地に位置する青木遺跡（出雲市東林木町）から中期後葉に遡る四隅

突出型墳丘墓を筆頭に、数基の四隅突出型墳丘墓が検出された。1基は日本海沿岸部における最古型式の四隅突出型墳丘墓になる可能性がある。多元論的な四隅突出型墳丘墓の研究に、新たな一石を投じることになろう。また、後期後葉に属する四隅突出型墳丘墓からは「円形状石組」の可能性のある石列が検出されている。その他、方形貼石墓数基も検出されており、一部は弥生時代後期後葉まで下がる可能性がある。日本海沿岸部における弥生墓制を再検討する上で、重要な資料が蓄積されつつある。今後の調査成果が注視される。

第6章を記すにあたり、次の方々から文献の提供を頂いた。記して感謝致します。

佐伯純也（米子市教育委員会）、中原斉（鳥取県教育委員会）（50音順、敬称略）

（註）

- 1) 川原和人1978「鳥根県における発生期の古墳―特に四隅突出型古墳について―」『古文化談叢』第4集
妹尾周三1993「四隅突出型墳丘墓について―出現の要素と貼石方形墳丘墓からの概観―」『古文化談叢』第30集（上）古文化談叢発刊20周年 小田富士雄代表還暦記念論集（I）
渡邊貞幸2003「四隅突出型弥生墳丘墓の「突出部」」『新世紀の考古学―大塚初重先生喜寿記念論文集―』大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会編
- 2) 藤田憲司2002「弥生墳丘墓の研究（1）―山陰の弥生墳丘墓（上）―」『調査研究報告』（財）大阪府文化財センター
また、墳丘長・墳丘高・突出部の規模を計測し、数値処理を加えた検討から、中国地方（山間部）、山陰地方、北陸地方におけるの四隅突出型墳丘墓の地域性を抽出したものに、次の論考がある。
大野英子2002「四隅突出型墳丘墓の地域性」『富山県婦中町 千坊山遺跡群試掘調査 報告書』婦中町教育委員会
- 3) 松本岩雄2003「出雲の四隅突出型墓」『鳥根県古代文化センター調査研究報告書16 宮山古墳群の研究』鳥根県古代文化センター 鳥根県埋蔵文化財調査センター
- 4) 門脇俊彦1971「順庵原一号墳について」『鳥根県文化財調査報告』第七集 鳥根県教育委員会
- 5) 註1) 川原1978に同じ
吉川 正1992「順庵原一号墓について―第3次調査の概要―」『鳥根考古学会誌』第9集 鳥根考古学会
吉川氏は主体部とストーンサークルの対応関係に対して、埋葬施設の形態や副葬品組成、ストーンサークルの形態等を具体的に積み上げ、明確な対応関係の抽出を試みている。
- 6) 近年、弥生墳丘墓の調査報告書中で「円形状石組（ストーンサークル）」の可能性のあるものが報告されている。
例えば、鳥取県岩美郡岩美町所在の新井三嶋谷墳丘墓の調査報告書中で、墳丘南斜面下方の貼石がストーンサークル状を呈している部分、あるいは方形の張り出し部の可能性を指摘する観察所見が報告されている。
- 7) 弥生時代中期中葉～後期前半に営まれた四隅突出型墳丘墓以外の、弥生墳丘墓や土壇墓においても円形状石組が確認されている。これらの遺構の整理と検討も今後必要である。
なお、木次町教育委員会2000『斐伊川広域一般河川改修工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 平田遺跡第Ⅲ調査区』に、土壇（墓）に伴う類例資料の紹介と弥生後期の墓制に対する検討がなされている。
- 8) 註4) に同じ
- 9) 管見のところ、中国地方山間部を除く日本海沿岸部で検出されている中期後葉～後期前葉の方形貼石墓は14遺跡17（+）で確認されている。この墓制に対する概念あるいは定義は、本来的には考古学的な分類論から求められるべきである。しかし、様々な考古学的用語が氾濫すれば、混乱を来す恐れがある。確かに、日本海沿岸部における方形貼石墓は規模や周溝の有無、立地、存続期間などのあり方が地域によって若干異なり、弥生時代中期に限れば、大きくは（石見・出雲・伯耆・因幡？）と（丹後・丹波）の地域性が存在する。小稿では細長い長方形、正方形に近い長方形に関わらず、「方形の墳丘」に「貼石」が施されている点こそが、この墓制を最も特徴付けていると考えている。「方形貼石墓」として総称する立場を採りたい。なお、現在のところ「方形貼石墓」に関しては次の分類案が示されている。

野島永氏は貼り石を持つ墳墓は台状墓や周溝墓として捉えられている点を指摘し、貼石を持つ属性を重要視した場合には、これらの名称を「方形貼り石墓」と容認出来るとする。しかし、四隅突出型墳丘墓とその墳丘規模に明確な差がないことを挙げ、貼り石を持つ墳丘墓（台状墓、周溝墓）を「貼り石方形墳丘墓」と呼称す

る立場を採る。

和田晴吾氏は弥生墳丘墓の基本形を「周溝墓」と「台状墓」に分類し、「方形貼石墓」を「台状墓」の地域の変容と捉えて「方形貼石台状墓」の名称を与えている。また、「方形貼石墓」の中には周溝を伴うものがあるため、これを「周溝墓」と「台状墓」の複合として「方形貼石周溝墓」の名称を与えている。

野島 永1991「京都府北部の貼り石墳丘墓について」『京都府埋蔵文化財論集第2集－創立十周年記念誌－』
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

和田晴吾2003「弥生墳丘墓の再検討」『古代日韓交流の考古学的研究－葬制の比較研究－』

10) 山本 清1975「四隅突出型方墳」『日本の中の朝鮮文化』28号

11) 註1) 川原和人1978に同じ

12) 註1) 渡邊貞幸2003に同じ

13) 註2) 藤田憲司2002に同じ

14) 註1) 渡邊貞幸2003に同じ

15) 註3) 松本岩雄2003に同じ

松本氏の分類したⅡA類の「立石」は、Ⅳ～Ⅴ－1期に中国地方山間部の四隅突出型墳丘墓に特徴的な、貼石に使用される石より小さい石で墳丘を縁取るものと、中野美保1号墓のように、貼石の石と同等規模の石で墳丘を縁取るものを指している。なお、両者の「立石」は墳丘斜面の貼石から少し離れて施されている。また、墳丘斜面の貼石に隣接して立石（縁石）を施す中野美保2号墓のような構造をしたものもⅡA類の範疇に含まれている。このことから、ここで記すⅡA類は中野美保2号墓の構造に限定した意味で使用する。

16) 山陰考古学研究集会編1997『第25回山陰考古学研究集会 四隅突出型墳丘墓とその時代』

17) 淀江町教育委員会2000『妻木晩田遺跡 洞ノ原地区・晩田山古墳群発掘調査報告書』

（遺跡引用文献）

青木遺跡 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター2004『青木遺跡現地説明会資料』

阿弥大寺1号墓 倉吉市教育委員会1981『上米積遺跡群発掘調査報告Ⅱ－阿弥大寺地区－』

尾高浅山1号墓 米子市教育委員会1998『尾高浅山遺跡』米子市文化財ガイド2

門の山第1号墳 近藤義郎・中尾寿雄1952「門の山第1号墳発掘調査報告」『佐良山古墳群の研究』津山市

来美1号墓 山本清1989「松江市矢田町来美の四隅突出型方形墳丘」『間内越1号墓・間内遺跡』松江市教育委員会

四拾貫小原墳丘墓 四拾貫小原発掘調査団1969『四拾貫小原』

順庵原1号墓 門脇俊彦1971「順庵原一号墳について」『島根県文化財調査報告』第七集 島根県教育委員会

吉川正1992「順庵原一号墓について－第3次調査の概要－」『島根考古学会誌』第9集 島根考古学会

陣山墳墓群 三次市教育委員会1996『陣山遺跡』

仙谷2号・3号墓 大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・鳥取県大山町教育委員会2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告』

仲仙寺9号墓 安来市教育委員会1972『仲仙寺古墳群』

千原遺跡 岩滝町教育委員会1988『千原遺跡第3次』京都府岩滝町文化財調査報告第11集

寺岡遺跡SX56 野田川町教育委員会1988『寺岡遺跡』京都府野田川町文化財調査報告第2集

奈具岡墳墓群 京都府弥栄町教育委員会1986『奈具岡遺跡第3次発掘調査報告書』

波来浜墳墓群 江津市教育委員会1973『波来浜遺跡発掘調査報告書－第1・2次緊急調査概報－』

新井三嶋谷墳丘墓 岩美町教育委員会2001『新井三嶋谷墳丘墓発掘調査報告書』岩美町文化財調査報告書第22集

西谷3号墓 渡邊貞幸他1993「西谷墳墓群の調査（Ⅰ）」『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』

島根大学法文学部考古学研究室

写真図版は、出雲市教育委員会編1995『四隅突出型墳丘墓の謎に迫る』の表紙に依拠する。

花園墳墓群 三次市教育委員会1980『史跡花園遺跡－調査と整備－』

日吉ヶ丘墳丘墓 加悦町教育委員会2001『日吉ヶ丘発掘調査現地説明会資料』

加悦町教育委員会2003『日吉ヶ丘遺跡（平成14年度）・明石大師山古墳群（平成14年度）』

加悦町文化財調査報告書第30集

間内越1号墓 松江市教育委員会1989『間内越1号墓・間内遺跡』

三成1号墓 丹羽野裕1999「穴道町 三成墳墓群について」『穴道町歴史叢書4』島根県穴道町教育委員会

（四隅突出型墳丘墓の類例抽出のための参考文献）

東森市良1989『四隅突出型墳丘墓』ニューサイエンス社

田中義昭1992『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』島根大学法文学部考古学研究室

出雲市教育委員会編1995『四隅突出型墳丘墓の謎に迫る』

山陰考古学研究集会編1997『第25回山陰考古学研究集会 四隅突出型墳丘墓とその時代』

（図版引用文献）

第126図

松本2003を参考に、本書作成。遺構図は各報告書・参考文献より一部改変後再トレース。

第127～128図

1～4：各報告書・文献より一部改変後再トレース。

第129図

各報告書より一部改変後再トレース。ただし、⑫・⑬は野島1991より複写転載。

図中の分布図は野島1991を参考に、一部改変と追加修正して本書作成。なお、中国地方山間部の資料を中心に四隅突出型墳丘墓（の祖形）として評価されるものが含まれている。同じく、墳丘形態が不明のもの（四拾貫小原墳丘墓）、方形にならないもの（門の山第1号墓）も含まれている。

第130図

本書作成